

船橋市障害者生活支援事業

2001年12月発行

船橋障害者自立生活センターニュース号外

相談室だより 第16号

〒273-0011 船橋市湊町1-20-3 ミナトハイツ102号

TEL: 047-495-6777 / FAX: 047-495-6776

サポーターの皆さん

～最近の相談から～

相談室は4人の相談員（内一人は事務員兼務）がいろいろな相談にのっています。しかし市町村障害者生活支援事業の仕事は相談だけではありません。市との契約を円滑に行うために各種行事を開催しています。ピア・カウンセリングと自立生活プログラムは支援事業の大事な仕事ですが、これには嘱託のピア・カウンセラーとセンターの職員や全国自立生活センター協議会のピア・カウンセリング委員会の全面的な協力をいただいています。

先日は地方から船橋で自立生活をしたいという青年が来られ、家探しをしました。嘱託の不動産屋さんが親切に同行して、バリアフリーの工事の手配もしてくださいました。嘱託にはほかに医師、看護婦、栄養士、建築士などもお願いしていて、それぞれの専

門分野で協力していただきます。

介助の相談も多いのですが、センターの介助者やボランティアの皆さんが快く、時には無理をしても引き受けてくださいます。移送には運転ボランティアの協力が欠かせません。今日も施設から自立したいという方が「うえいぶ」号を利用して来られました。

介助者やリフトカーの派遣をするセンターは会員の皆様の会費で運営しています。事業を委託して下さった市の方々をはじめ本当に大勢の人達に支援していただいてこの事業は成り立っています。

サポーターの皆さんに感謝して、平成14年もどうぞよい年であります様お祈りします。

(前田)



障害物競争

黒澤日出子

今日まで、堂々と口八丁手八丁で何とか生き延びて来た私ですので、文章を書くなどと言う事は、「恥」を書き並べて行く様なもので口で言ったことは消えますが、活字になっては証拠が残ってしまうため、いい加減な事も書けず・・・しかも今の私は「障害を乗り越え自立を！」と言う立場ですので、文章が書けないという障害を自ら乗り越えなければ、センターに置いてもらえないかもしれません？ Mさんに《だより》の原稿頼みましたよ！と命令調に言われてから三日三晩の産みの苦しみを味わうことになりました。

運動会で障害物競争がありますね。ハードルを飛んだり、ジグザグに置かれたポールをくぐり、跳び箱を跨ぎ障害物を乗り越えられた者が立派で、越えられなかった者は、落ちこぼれ・駄目人間の様に思われ、

スタート位置までは皆同じ人だったのに、ゴールでは差別が生じ、さまざまなレッテルが貼られてしまう。

街中では心ない沢山の障害物に囲まれ、障害者にとっての外出はまさに障害物競争の様ではありませんか。

だからと言って家に閉じこもっては、障害物がのさばるばかり、障害物さえなければ、一般人と同じ自由に外出出来るのだから、障害物が障害者を作り出している訳です。同じ障害でも「物と者」では敵同士、放っておけば家から一步も出られなくなります。

このままでは、一生障害物競争ですよ！

皆さんで、どしどし街中に出て、ハードルを手摺りに、跳び箱にはスロープを付け、差別のないゴールを目指して！敵を味方に変えて行こうではありませんか。

～ コラム ～

バリア今昔

宮尾 修

お上がやると、下もすぐする。これは昔からのこの国の伝統ですが、いわゆるバリアフリー法が施行されたことから、船橋でも道路点検などをすることになり、先日は〈まち歩き〉がありました。

といっても、市の局長さんや議員さんと、駅前通りを大名行列で歩いてだけです。電動車いすを操るようになって30年。相変わらずひどい路だなといった感想が浮かんだだけでしたが、それに比べると京成やJRの電車の駅は、それなりの変化があるようです。

特に電車のホームまでエスカレーターのついたJRは、人の力で車いすを担いで上げた時代、階段昇降機なるものの世話になった時代、今のエスカレーターと変化が大きい。中でも思い出すのは、人の力で階段を上げたところで、駅に行くとき先ず改札の駅員さんに頼みます。するとその駅員さんは、手にしたハサミを動かしながら（当時は改札も自動ではなかった）、別の駅員に向かって「電動、付き添いナシ」とか叫ぶ。

叫ばれた駅員の方は、改札から出て、人を集めに駆け出していく。しばらくすると3人、4人と集まってきますが、必要な6人がなかなかそろわず、長いと20分近く待たされたのを覚えています。

でも、轟音は出す、乗ると仰向けにはされるので、衆人注視の目に遭った昇降機よりも、記憶の中では好い印象で残っている。まだ国鉄の時代でしたが、話し好きの助役さんなどもいて、「国会に行くんです」と言ったりすると、「八代センセイによろしく」と言われたりしました。最初の車いす議員として、八代英太氏の名が知れ渡っていた時代です。

まだどこも「ノーマライゼーション」という言葉もなく、「バリアフリー」のバの字もなかった。列車で旅行中の脳性マヒ者が、言葉が通じなかったことから、途中で列車を降ろされるという事件さえありました。が、それでも電車を使った人たちもいれば、乗せてくれた駅員さんもいたのです。

人物紹介

大林 彩

明けましておめでとうございます。
皆様よいお年を迎えのことと思います。

私は、自立生活センターでボランティアをしている大林彩といます。センターに来るようになって、早いもので1年4ヶ月がたちました。高校の時から仲の良かった丹森めぐみさんと、自分達にできる範囲のお手伝いをさせてもらっています。私達は、趣味も同じ折り紙なので、二人でたくさんのを折っています。

この1年4ヶ月の間には、いろいろなことがありました。初めて受付をやらせてもらって、とても緊張したこと。通いなれた事務所から新しい事務所に引越しをしたこと。よく自立生活センターに来ていて、買い物や散歩など一緒に行った高野さんが急に亡くなられ、悲しいお別れをしたことなどが、とても心に残っています。

これからもできる限りのお手伝いをしていきたいと思っていますので、今年もよろしくお願いします。

丹森 めぐみ

はじめまして、丹森めぐみと申します。

このセンターを知るきっかけは、パソコンのインターネットで知り、2000年の秋から火曜と木曜の週2回ボランティアをしています。最初はどんなことをするんだろうと不安でしたが、センターのみんなに教えてもらいながら少しずつできるようになりました。

これからもよろしくお願いします。

